様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２１ 日現在

機関番号：２２４０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2016
課題番号：２５８７０５８８

研究課題名（和文）巡礼の「聖年」に関する宗教民俗学的研究―四国遍路と高野山の開創1200年

研究課題名（英文）The study on the pilgrimage "Holy-Memorial Years" from a viewpoint of religious studies and folklore

研究代表者
浅川　泰宏（ASAKAWA, Yasuhiro）

埼玉県立大学・保健医療福祉学部・准教授

研究者番号：９０５１３２００

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：　弘法大師信仰の聖地である四国霊場と高野山の開創1200年記念イベントを、聖年という概念を通して調査した。四国開創1200年で実施された本尊の御開帳や博物館展示は、世界遺産登録を見据えた四国霊場の文化的価値の確立と発信という側面があることを明らかにした。また、四国霊場に現存する過去の聖年モニュメントの調査から、四国遍路開創聖年は、大正期の1100年の時期に創造された可能性が高いことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：I study on the commemorative events of the 1200th anniversary of the Shikoku pilgrimage in 2014 and those of the Koya-san temles in 2015 using the concept of “Holy-Memorial Years”. During the 1200th anniversary of the Shikoku pilgrimage, the hidden Buddhist statues of the temples and various historical cultural properties were displayed to the public. This study analyses that such commemorative events were conducted for the purpose of establishing and announcing the cultural values of the Shikoku pilgrimage which is aimed to be registered as the World Heritage. I also study on the existing memorial monuments of the past “Holy-Memorial Years” and discover the high possibility of the creation of the Holy-Memorial year for the founding of the Shikoku pilgrimage at the 1100th anniversary.

研究分野：文化人類学・民俗学、宗教学

キーワード：巡礼　遍路　聖年　ツーリズム　民俗宗教　高野山　聖年モニュメント　四国霊場

１．研究開始当初の背景

巡礼は宗教、文化、社会に内在される世界的な現象である。近年では伝統的な巡礼が復興される事例が数多く報告される一方で、アニメやゲームのファンが作品に登場する舞台を探訪する現象が「聖地巡礼（舞台探訪）」と呼ばれ、ツーリズムや地域振興に活用されている。つまり、巡礼は宗教的実践でありながらその姿を幾重にも変容させ、とりわけ現代社会においては、消費行動とも結びついた文化現象となっている。

このような状況において、巡礼の「伝統」に着目し、そこから商業的な価値を掘り起こす試みも行われている。キリスト教の聖ヤコブの聖地「サンティアゴ・デ・コンポステーラ」や、弘法大師ゆかりの寺院を巡る巡礼「四国遍路」など、古代・中世の聖人と結びつけられた著名な巡礼は、ともすれば 1000 年を越える長大な時間軸で起源や歴史が語られる。そこでは鉄道や自動車など、交通の近代化によって廃れた「歩く道＝巡礼古道」を、長年の巡礼者の足跡が刻み込まれた歴史遺産として再発見し、現代でも使用可能な巡礼路に再生することで、過去との連続性を確保した「生きた文化資産」の価値を標榜し、並行してツーリズムや地域振興に役立てるという動きがある。

だが、こうした巡礼の「歴史」、とりわけ古の聖人に遡る巡礼の起源の物語は、史実とは認めがたいという指摘が歴史学からなされてきた。だが本研究の目的は、必ずしも時間軸に沿った史実の解明にあるのではない。むしろ「創られた伝統」としての巡礼が「創られる現場」を対象化し、巡礼の起源と現在がどのように想像的に接合されるのかという関心から、本研究は構想された。

２．研究の目的

本研究では、巡礼の起源と現在との想像的接合をとらえる切り口として、「聖年 (Holy-Memorial Year)」という概念を設定した。本研究でいう「聖年」とは、聖地の創造など当該巡礼の歴史的あるいは神話的始原から起算した節目の年を記念するものである。

巡礼は祝祭的側面を持つ。従来、巡礼の類型論として「激憤／静寂」という対立項を設定し、四国遍路や西国巡礼は静寂型、伊勢参宮の「お陰参り」などを激憤型とみなす研究もあった。だが、巡礼の祝祭的状況を「類型」ではなくて「状況」と捕らえ直すとき、例えば、静寂型とされた四国遍路にも、春や秋に、また 4 年に一度の閏年に、あるいは弘法大師空海にまつわる節目の年などに、祝祭的状況が醸成される。巡礼の祝祭的状況は、①季節的なもの、②周期的なもの、③記念碑的なものと整理できる。本研究で着目する「聖年」は③に該当する。②と③は複数年に一度という点では似ているが、②は巡礼の始原が特に参照されないという違いがある。③は線状の、②は環状の時間意識に立脚すると言っても良い。②の具体例としては、数え 7 年周期の善光寺前立本尊御開帳や秩父三十四観音巡礼の御開帳、20 年周期の伊勢神宮の遷宮、25 年周期のローマ巡礼の Holy Year などが挙げられる。そして③に該当するのが、本研究でとりあげる四国遍路や高野山の開創聖年である。

四国遍路と高野山は、ともに弘法大師空海ゆかりの聖地である。四国遍路の歴史的起源は定かではないが、空海が弘仁 6 年（815）、42 歳の時に四国霊場を開創したという伝説は巡礼者に広く周知されている。弘仁 7 年（816）は空海が高野山開創の勅許を得た年である。ここから起算して、2014 年は四国霊場開創 1200 年に、2015 年は高野山開創 1200 年にあたるとされ、さまざまな記念事業が営まれた。

本研究は、この 2 つの連続する開創聖年に注目し、その記念事業等を、文化人類学的手法による現地調査を通じて丹念に追いかけることで、多角的に記述し、考察することを目的とした。

３．研究の方法

四国霊場開創 1200 年記念事業および高野山開創 1200 年記念事業に関する現地調査を行った。記念事業の中核をなしたのは、本尊および弘法大師像の開帳や記念法要の実施である。

2014 年の四国霊場開創 1200 年については、四国八十八ヶ所霊場会による記念事業日程をもとに、できるだけ多くの事例が調査できるよう計画を立てて実施した。

2015 年の高野山開創 1200 年については、2015 年 4 月 2 日から 5 月 21 日まで連日記念法会が営まれたが、4 月 2 日の開白大法会、4 月 23 日の四国八十八ヶ所霊場会による慶讃法会、5 月 21 日の結願大法会などを重点的に調査した。

さらに 2016 年度には、四国霊場開創 1200 年の影響や痕跡を確認するための調査を行った。具体的には聖年を記念する奉納品「聖年モニュメント」に注目し、四国八十八ヶ所および別格 20 霊場において、四国霊場開創に加えて、弘法大師信仰に関連が深い、御遠忌および御誕生を記念するモニュメントを調査した。

４．研究成果

（1）年度ごとの主な成果

①2013 年度

1）四国霊場開創 1200 年記念事業の整理と調査、2）関連事例の調査と検討を実施した。1）については、5 月に「四国八十八ヶ所めぐり お砂踏み in 仙台空港」の参与観察を行ったほか、11 月に発表された各寺院の記念事業日程を整理し、3 月に御開帳などを実施した寺院を中心に、34 ヵ寺の現地調査を行った。3 月下旬には、歩き遍路の象徴的区間のひと

つである、第 11 番藤井寺から第 12 番焼山寺を経て、第 13 番大日寺に至る歩き遍路の参与観察を行い、「聖年」において醸成される共時的感覚の考察を行った。2）については、伊勢神宮、出雲大社、立石寺、善光寺など、平成 25 年度中に実施された遷宮や居開帳・出開帳を調査し、「聖年」概念の再考につなげた。

②2014 年度

四国霊場開創 1200 年の当該年である。八十八ヶ所の調査計画を立てる段階で、別格 20 霊場や小豆島の島四国も同様に開創 1200 年を標榜し、記念事業を行うことがわかったため、これらも調査対象に加えた。各札所での本尊や弘法大師像の公開状況、結縁の手綱や回向柱などの設置状況などに注目した。

本尊の御開帳については、八十八ヶ所中、38 ヵ寺(43%)で本尊の拝観が可能であった。平年の 2012 年の調査では 10 ヵ寺（11%）であったので、その違いは明白である。一方、手綱が設置されたのは 16 ヵ寺、回向柱は 7 ヵ寺であった。同年は秩父 34 観音巡礼の午歳総開帳の当年でもあったが、秩父では全ての札所で結縁の綱および回向柱を伴う本尊開帳が実施されたのとは対称的であった。

このような本尊開帳のあり方は、「聖年」が捉えようとする歴史と現在の想像的接合に関連する。このことがより明確な形となってあらわれたのが、開創 1200 年記念の四国四県連携事業として開催された『空海の足音四国遍路展』である。近年の研究成果を取り込み、札所寺院や高野山の霊宝を取りそろえた本展示は、皮肉なことに、開創 1200 年の根拠となる四国霊場弘仁 6 年開創説が「伝説」であることを浮き彫りにする。他方、個々の札所寺院の所蔵品には、中世にさかのぼるものも少なくない。つまり、ここには、開創 1200 年を信仰上の伝説とする一方で、四国霊場の歴史の深みの一端を学術的権威を携えて開示し、その文化的価値を確立しようとする姿勢が見てとれる。つまり、2014 年の四国霊場開創 1200 年は、現在進行中の世界遺産登録運動を見据えた、四国遍路の「歴史」の再構築の機会となったことが指摘できる。

以上の成果の一部を年度末に公刊したほか、5 月にも第 57 回歴史地理学会において、巡礼研究の展開と「聖年」概念に関する研究発表を行った。

③2015 年度

高野山開創 1200 年の当該年である。高野山では 4 月 2 日から 5 月 21 日まで、金堂、金剛峯寺、奥の院などで本尊開帳や記念法要などが連日実施され、山内は多くの参拝客で賑わった。この間のべ 11 日間滞在し、主要な法要を儀礼の執行と語りの内容を押さえることに力点をおいて観察しつつ、山内各所での関連イベントにも積極的に足を運び、祝祭状況と共時的感覚の観察・記録につとめた。特に 4 月 23 日に実施された四国八十八ヶ所霊場会による開創記念慶讃法会においては、高野山と四国の連携が儀礼や語りの中でどのように表現されるのかという点に注意して観察した。さらに比較のために、同年 4 月 5 日から 5 月 31 日まで実施された善光寺前立本尊御開帳を併せて調査した。また秋には丹生都比売神社や吉野金峯山寺など、高野山開創 1200 年と連携した周辺の聖地についての調査も実施した。さらに、昨年度の成果の一部から発展的に生じた大正期の四国霊場開創 1100 年記念事業についての研究発表を 7 月に行った。

④2016 年度

聖年の記憶を後世に伝える記念碑的奉納品「聖年モニュメント」の調査を、四国八十八ヶ所と別格 20 ヶ所霊場において実施した。対象とする聖年については、霊場開創のみならず、弘法大師の御誕生や御遠忌も含めることで、より広い視野から霊場開創の聖年を理解することを試みた。

図 1　開創 1100 年の聖年モニュメント（弥谷寺）

調査の結果、総計 136 基を確認した。霊場開創については、開創 1100 年（1914）の 15 基、開創 1150 年（1964）の 6 基、開創 1200 年（2014）の 6 基を確認した。50 年周期という規則性からすれば、1864 年に霊場開創 1050 年が相当するが、該当する聖年モニュメントを見つけることはできなかった。一方、1834 年の御遠忌 1100 年のモニュメントは確認できたことや、開創 1100 年のモニュメントに、個別の開創寺伝と霊場全体の開創伝説を接続という課題に関連する事例を見つけたことなどから、霊場開創という聖年は開創 1100 年の際に創出された可能性が高いことが指摘できると結論づけた。最後に聖年モニ

ュメントの調査結果をまとめた論文を年度末に刊行した。

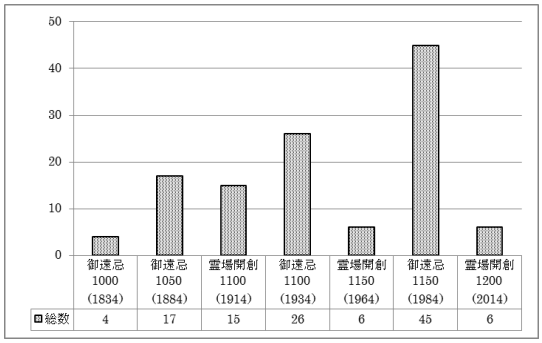

図 2　四国霊場における聖年モニュメントの数
（御誕生のモニュメントは省略）

（2）今後の展望

①四国霊場開創 1100 年について

四国遍路と高野山はともに 1000 年を越える「歴史」を持つとされ、開創聖年は 50 年に一度の周期で記念されてきた。だが、本研究で明らかにしたように、四国遍路の開創聖年を記念するという発想は、大正期の開創 1100 年の時期に創造された可能性が高く、その意味で比較的近年に創造された新しい「伝統」である。また、興味深いことに、今回の開創 1200 年においては、開創 1100 年および 1150 年に言及されることはほとんどなかった。このことは四国遍路という民俗宗教が主張する 1000 年を越える連続性を相対化する「断絶」を持つことを意味する。

したがって、四国遍路については、過去 2 回の開創聖年、とりわけ開創 1100 年に着目し、異なる寺歴を持つ八十八ヶ所が、弘法大師によってある年にひとつにまとめ上げられたという四国霊場を全体化する発想がどのような背景から生まれてきたかを明らかにすることが今後の課題となる。またこの課題は近年活発化している近代仏教研究や近代のツーリズム研究にも貢献できることが予想される。

②「聖年」概念の一般性について

「聖年」は巡礼を現代の視点から語り直し、再構築する契機となる。本研究で取り上げた四国遍路や高野山以外の最近の事例として、日光東照宮 400 年式年大祭（2015 年）、同御鎮座 400 年（2016 年）、白山開山 1300 年（2017 年）、西国三十三所草創 1300 年（2018 年）などが、それぞれの「聖年」記念事業を企画・展開している。本研究の「聖年」概念は、広い意味での宗教伝統が再構築される契機を捉える一般性を持つと考えられる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　2　件）

(1) 浅川泰宏、四国霊場の聖年モニュメント―御遠忌、御誕生、そして四国霊場開創の「記憶」、四国遍路と世界の巡礼、査読無、2 巻、2017 年、pp.46-54

(2) 浅川泰宏、巡礼が刻む道と時、歴史地理学、査読無、57 巻-1 号、2015 年、pp.4-13

〔学会発表〕（計　4　件）

(1) 浅川泰宏、四国霊場の開創 1100 年―大正初期の地方新聞から、愛媛大学法文学部附属四国遍路・世界の巡礼研究センター第 3 回公開研究会、2016 年 07 月 30 日、愛媛大学（愛媛県・松山市）

(2) 浅川泰宏、四国霊場開創伝説についての覚書、愛媛大学法文学部附属四国遍路・世界の巡礼研究センター第 1 回公開研究会、2015 年 07 月 11 日、愛媛大学（愛媛県・松山市）

(3) 浅川泰宏、巡礼が刻む時と道―1980 年代以降の研究史と展望、第 57 回歴史地理学会、2014 年 05 月 18 日、長崎外国語大学（長崎県・長崎市）

(4) 浅川泰宏、地域表象としての『遍路文化』―巡礼の観光資源化をめぐって、日本文化人類学会第 47 回学術大会、2013 年 06 月 09 日、慶應義塾大学（東京都・港区）

〔図書〕（計　1　件）

(1) 島薗進、藤原善郎、佐藤壮広、高岡豊、阿良田麻里子、宮崎賢太郎、浅川泰宏ほか、平凡社、宗教と現代のわかる本 2015、2015 年、pp.200-203

〔その他〕

(1) 浅川泰宏、四国遍路の特徴―善根宿とお接待、大法輪、第 83 巻 9 号、大法輪閣、2016 年、pp.76-79

(2) 浅川泰宏、修行の道場【土佐国 高知県】、一個人、第 15 巻 3 号、KK ベストセラーズ、2014 年、pp.51-57

(3) 浅川泰宏、四国遍路の歴史、あぷろく、第 19 号、公益財団法人いきいき埼玉、2013 年、pp.4-5

６．研究組織

(1)研究代表者

浅川　泰宏（ASAKAWA, Yasuhiro ）
埼玉県立大学・保健医療福祉学部・准教授
研究者番号：90513200